君と二人で――

間宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と二人で――

【Ｎコード】
Ｎ２１０６Ｗ

【作者名】
間宮

【あらすじ】
どこにでもいる本好きな青年が作家を目指す話。でも才能無いからなれなくて…。妹の為に生きているって言っても過言じゃない程妹大好きな残念な主人公です。

君と二人で　1

将来何になりたい？
そんなの作家に決まってる。
俺は即答する。
俺は本が好きだ。大好きだ。三度の飯より読書なんて当たり前。小学生の頃から全ての小遣いを本に費やした。
それ程本が好きな俺が作家を目指すのも当然といえば当然だ。
だから俺は今日も書く。
書いて書いて書きまくる。

本を読んでは物語を書く。
そんな生活がいつからか続いていた。
勿論学校にもちゃんと行った。だが授業中教師の目を盗んでは小説を書いていた。
何冊もノートを使ったし賞にも年に数回応募している。
だが今俺がこうして駄目な人生を送っているという事は未だに夢を実現できていないということだ。
大体の作品が二時審査で落ちる。これだけ書いても最終審査までいかないのは悔しいが逆にそれが俺を煽った。
無理だと分かっていながらやり続ける俺は馬鹿だと思う。これは自他共に認める。
だが俺はその辺の馬鹿とは違う。小説馬鹿だ。
何度も人に小説馬鹿と言われた俺は今ではその言葉は俺の為だけにある言葉なんじゃないかと錯覚する。
それくらい本が好きなんだ。

そのお陰で進路が危うくなった。だから必死に勉強した。
本を読む時間も小説を書く時間も寝る間も惜しんで勉強した。

しかし本を読まないイライラや書きたい衝動が抑えられなくて倒れた。ついでに寝不足で丸三日は寝ていたと親に言われてやっぱり俺は馬鹿だと思った。

が、奇跡的にテスト最終日の帰りに倒れたためテストの順位は下から数えた方が早かったのに妹よりも良い順位を取ってしまった。

それから毎日勉強をしたら成績は信じられない程上がった。その後の三者面談で教師と母親は泣いて喜んだ。比喩ではなくもちろんそのままの意味でだ。

そして俺は見事大学へ進学した。

叔父さんはすごいなぁーと言って入学金を全額払ってくれた。

ガッツポーズをしたら母親に殴られた。

親戚のおばさんは奇跡だと言って目を見開いて驚いていた。

その顔があまりにもブサイクでつい吹き出したら親父に殴られた。

あの時の痛みは今でも覚えてる。いつか仕返ししてやる。

じーちゃんも驚いたと言って愉快そうに笑って時計をくれた。

妹とお揃いの懐中時計だった。イニシャルが刻まれたその時計は俺のお気に入りだ。

じーちゃんはそれなりに歳なのにまだ現役で時計を創っている。

やりたい事を好きなだけやるところはじーちゃん似だっていろんな人に言われる。それが俺には少し照れ臭いけどそれ以上に嬉しかった。

俺にとって自慢のじーちゃんだから。

そんな俺は大学に入ると同時に一人暮らしを始めた。今はもう一人暮しを始めて一年ちょっと経つ。

まぁこんなのはどこにでもある些細な事なのだが一人暮らしをしてやっと読書を邪魔されないと思ったら丁度良いタイミングでピンポーンというインターホンの軽快な音が鳴る。

誰だよ！

面倒くささ満載の顔で客人を迎えると招かれた相手は顔を見た瞬間、

俺に負けないぐらい嫌そうな顔をした。
「我が妹ながらひどい顔だな」
「お互い様よ。」
笑顔で返された。
そこで否定しないのがいいところだ。
「まぁ上がれや」
部屋に招くとお邪魔しますと言って靴を脱ぐ。
「何かあったん？」
「……」
妹が座るのを見届けた後声をかけると顔を赤らめて俯いた。
「どした？」
相変わらず分かり易いやつだと思いながら訊く。
「とっ時計が出来たから見て欲しくて」
恥ずかしそうにポケットに手を突っ込み取り出す。
「ほう、」
綺麗だ。
じーちゃんに貰った懐中時計に少し似ている。けどデザインはそれよりも少し控えめすごくシンプルだ。大人しいっていうのか…？まぁそんな感じだ。俺は妹と違って時計にキョーミ無えから分かんないけど。
「じーちゃんに教わったの？」
「うん！」
自信満々の声で答える。可愛ええのう。
っといかんいかん、妹にみとれてる場合じゃない。
「これならあげても貰ってくれると思うんだ…。」
そんな寂しそうな顔で言うなよ。喉の奥からでかけた言葉を寸のところで止める。

可哀想な俺の妹
無理だって分かっていてもそれをやり続ける。

兄妹揃って馬鹿なのね～♪
なんつって。そんなの冗談にもなんねーよと自分につっこむ。

「あと餞別」
そう言って紙袋を渡される。中身は本だ。十数冊入っている。
妹は俺以上に本が好きで近所や学校では有名な文学少女だ。
妹の本好きに影響されて俺も本が好きになったからかなりの本好きだ。
「何か良い作品あった？」
「そうね…新人賞とったあの人の作品は割と好き、かな」
あぁ、と呟くと妹は読んだことあった？と訊いてきた。
首を振って否定すると微笑んだ。
「なら良かった。その作品の主人公、かづにちょっと似てるんだよね。」
「馬鹿なとこが？」
「そう！」
冗談で言ったのに妹は笑顔で頷く。しかも即答だ。
酷いっ！お兄ちゃん泣いちゃうよー！

「俺も頑張んないとなー」
呟くように言うと妹はそうだね、と同じように呟く。
「また書けたら読ませてね」
本を捲りながら答える。
「いいけど…智も書いてみたらいいのに」
「えっ、そんな恐れ多いよ！」
何故か恐縮しはじめた。
「てか実際俺より智の方が才能あると思うよ？」
持っていた本から妹に視線を向けると俯いていて表情が分からなかった。
「私は霞月が書く物語が好きなの。」

うん。知ってる。
昔からそうだった。俺が書いた物語をどんな本より喜んで読んでくれた。
謂わば俺の一番のファンだ。
その事が俺には誇らしかった。
何せ文学少女のお墨付きだからな！

「じゃあ、そろそろおいとましようかな。」
「もう帰んの？送ってくか？」
尋ねると首を振っていいやと返される。
「今日はレイと出掛ける予定があるから」
そう続けると妹は立ち上がって鞄を手に取る。
「早くデビューできるといいね」
「だな。…約束、忘れんなよ。」
声が自分でも低くなったな、と思った。
「忘れないよ。それは優君と関係無いから」
「そうだな。…早くつき合っちゃえばいいのに。」
肯定した後つい思った事が口に出てしまった。
「なっ！何言ってるの！？」
顔が真っ赤だ。本当、わっかりやすいなぁー♪

「じゃあな。好きだよ、智祈」
「ありがとう」

そして妹の姿が見えなくなるまで玄関に立っていた。

大好きな俺の妹。
世間では俺みたいな奴をシスコンと呼ぶのだろう。
それでもいい。俺はシスコンで小説馬鹿だ。

でもいいだろう、…智祈とは生まれたときからずっと一緒なんだ。
惹かれたって不思議じゃない。ただ俺たちが双子の兄妹ってだけ。
他は変わらない。ただの男と女。だが俺の場合は智祈とどーこーなりたいとかそういう事じゃない。
一緒にいれれば良いんだ。
本以上に智祈のことが大好きだ。たぶん愛してる。

…だからかもしれない。俺が小説を書く理由。
ただ智祈に喜んでもらいたい。それだけの理由で何年も書き続けている。
好きな人が自分の事を何か一つでも好きだと言ってくれれば俺はそれだけで満足だ。
だから智祈に好きな人がいることも許せるし俺はそいつの事を認めている。何より妹が惚れた相手だ。信用できるやつなんだ。
智祈が幸せになってくれるなら智祈の恋を全力で応援したいと思ってる。だってそれが兄の務めってもんだろ？

智祈は俺がさっきのように好きだと言っても「ありがとう」としか返してくれない。
これはたぶんあいつにとっての線引きだ。
俺と違ってあいつはまともだから俺の気持ちを受け取ってくれても応えてはくれない――
それが現実だ。

それでも俺は智祈の兄で本当に良かったと思う。
だって俺は智祈にとってたった一人の兄という存在だから――

智祈は可愛いから友達もたくさんいるし好きな人もいる。
だけど兄は俺しかいないんだ。智祈の事を“妹”と呼べるのは俺しかいない。

それは俺にとってどれくらい誇らしいかなんて言葉じゃ表現出来ないぐらい嬉しい事だし優越感すらある。
これは唯一兄としての特権だと思う。

君と二人で　2

「書けたあぁー」
見た目がものすっごぉーく古びた小さなアパートの一室に響く男の声。近所迷惑だ！と返したくなるほど迷惑極まりない声量だ。

やっと作品が書けたという解放感が胸一杯に広がる。妹の喜ぶ顔が見れると思うと嬉しくてつい笑みが零れる。
さっそく妹に見せなければ…！
そう思い机の上に置いてある携帯を取り素早くメールを打つ。
メールを送るとすぐに返事が返ってきた。
今日はバイトがあるから明日の午後に取りにくる。俺は明日の午後からも講義があるがそんなのどうでもいい。明日は四日ぶりに妹に会えるのだ。休むに決まっている。

そんな感じで二時間しか寝ていないにも関わらず朝からハイテンションで愛用のチャリ（命名：八代さん二号）に乗り大学へ向かった。

自転車をこいで一時間もしないところに俺の通う大学はある。
大学に入っても相変わらず小説馬鹿な俺は大学に入っても成績が悪く…
なんて事はなくて実は妹に「どうせまた本しか読まないんでしょ」と言われ小学校の教科書を渡された。
はいはい、と受け流した俺に妹は教科書だって霞月の好きな文字がたくさんあるのにと言われ文字フェチな俺はその一言で渡された教科書（全教科ニ～六年生）を三日で読破した。
懐かしかった！随分と勉強になった。何せ今まで８×７は５８だと思い込んでいたから。
それから休みの間に中学、高校の教科書を読んだ。

問題集やテキストだって文字あるじゃん♪てことで妹の参考書を借りて読んだりもした。
国語の教科書の太宰治とか森鴎外とか大好き！ヘッセが載っているのを見つけた時は感動した。
だがしかし、数学と理科の計算が壊滅的にできないという事を悟った。
一度読んだ本は大体の内容なら忘れることがないのがちょっとした自慢だが計算だと応用もしなくてはならないからどうしてもダメだ。
だから今日も同じ大学に通う知り合いに教えてもらう予定だ。はじめは一人に教えてもらっていたが俺があまりにも計算が出来ない所為か…何時の間にかローテーションを組んで教えてくれる人が増えていた。

やっと大学に着いた。本館と離れた別館に着くにはまだ時間がかかりそうだ。
ちなみに本館は第一から第七棟で成っていてかなり広い。
お蔭でチャリで移動してんのにすっげー疲れる…一応運動してるはずなんだけどなぁー
別館には主にサークルの部室などがある。…サークルって部なのか？部活じゃないから部室って云わないか？サークルに所属してねーから分かんねぇや。
本当はいくつかのサークルに所属はしていたがどれも飽きてすぐに辞めてしまった。本命の本関係のサークルも全部試しに入ってみたはいいものの…どれも数日で辞めた覚えがある。
だからサークルのメンバーの名前を一人も覚えなかったり本格的な活動をする前に抜けたためサークルがどういうものなのかイマイチ分からない。
俺の通ってるサークル（定期的に行ってはいるけど入ってはいない）はまともじゃないから全くと言って良い程参考にならない。
話は戻って、別館には部室（？）の他には特別室や研究室がある。

周りが木など自然に囲まれているため採取とか何かと便利だからそこにあるらしい。よく分かんねーけど。

本館から離れているのに別館には人が多い。
理由は単純に別館で行われる講義が面白いから。俺は別館でやる講義を受けたことが無いからよく分からないが解り易い上に面白いで評判のよさは大学に通っていれば誰の耳にも入るぐらいだ。
なんでもある教授が助手の事が気に入らなくて1日講義をその助手に任せると云う嫌がらせをしたらしい。実際そんな事して大丈夫か？と思うがそれは置いとくとして
翌日、教授が大学に来て自分の助手が学生にどれ程の悪態をつかれているのか聞き耳を立てていたところ、なんとその教授の期待を見事裏切り講義は絶賛された。そしてやはり助手が嫌いな教授は一人で勝手に張り合い、助手に負けじと愉快な講義をしようと努力した。
その結果、その教授の講義は面白いと絶賛されるようになった。
良い話と云うわけでもないし面白い話と云うわけでも無く
…何とも言えない話だ。
そんなエピソードを思い出しながらチャリをこいでいると別館に到着した。

君と二人で　3

――ガチャッ、バンッ

情報文化研究同好会という一見真面目そーなサークル名のプレートがかかったドアを勢い良く開ける。

「おかえり、早かったなー」

聞いただけでテンションガタ落ちしそうなやる気のない声が部屋の端の方から聞こえた。

「俺だよ！宮ちゃんじゃねーよ」

間違えられて若干イラッ☆としながら部屋の奥へ進んで行く。

すると見た目ものっそいチャラい男が部屋の隅に追いやられたパイプ椅子に腰掛けていた。

「あぁ？てめぇそれでも教えて貰ってるやつの立場か？」

「さーせん。いつも教えてくれてありがとうございます、アリスさばッ」

頭を叩かれたお陰で舌を噛んだ。普通に生活してたらこんなに勢い良く舌噛まないよね…超絶痛え…。

「冗談だよ！じょ・う・だ・ん」

今更弁解してもどうやら遅かったらしい…ドス黒いオーラが漂っている。

グッバイ、俺の人生…

なーんt「たっだいまぁー」

もろ被ったぞ！

「ごめんね、アリスちゃん。いつもの売ってなかった」

「いや、いい。ありがとな」

さっきの雰囲気とは打って変わってアリス…じゃなかった、有栖川春海は部屋に入ってきた女の子に応える。

くそっ！バカップルめが！！悔しくなんか全然ないんだからな！俺だって智祈とイチャイチャした事あるもん。

「黙れシスコン」

有栖川がドスのきいた低い声とともに睨んでくる。とんでもなく迫力満点だ。女の子相手ならまじで泣かれそうなくらいだ。

「あれ、もしかして俺声に出てた？」

首を傾け問いかけると二人同時に頷かれた。

「どの辺から？」

「バカップルのところから」

ふむふむ、つまり初めからか…ってマジか！

「ふっ聞かれたなら仕方ない、俺と妹がどれだけ仲が良いか語り尽くしてやろう！そんじょそこらのバカップルと違って俺達は深い、切っても切れない縁で結ばれてるからな！！」

腕組みをしてさあ語ろうというときに有栖川の彼女、宮ちゃんが割って入ってきた。

「待って、それは聞き捨てなら無い。第一私達はそんじょそこらのバカップルじゃない。馬鹿なのはこいつだけ。」

彼氏をこいつ呼ばわりして指をさす。有栖川の扱いが酷すぎる…ちょっとかわいそ。

「そんな事はどうでも良いから霞月はとっとと勉強すんぞ」

「「どうでも良くない！」」

宮ちゃんと思いっきり声がハモって有栖川に言い返す。

はぁ、と盛大な溜め息だけが返された。

君と二人で　４（前書き）

３の続きな感じの話。短いです。

君と二人で　4

――有栖川春海

ここからちょいと離れたところでは彼の名を知らない人はいないと云われる程有名な不良。辺りのチンピラやギャング集団の憧れ的存在でいつも独りの孤独な一匹狼だったらしい。

俺的には単に友達がいない可哀想なやつに見えるんだけどなぁ…。

目つきが悪くて周りから距離を置かれてチンピラに絡まれるよーになってーの強くなって、ってゆーベタな理由だと思う。

めんどーだから二人の出逢いは割愛してーの、噂の宮ちゃんこと夜鷹和奏は有栖川との出逢いで一気に友達が激減したうえに周りからは恐れられた。そこまでならまだしも…憧れの人があんなにもあっさり負かされるなんて信じられるわけが無い、信じたくない、そんな奴が大勢いた。そんな下衆共に宮ちゃんは教えられない程喧嘩を売られ一時期不登校になった。

勿論売られた喧嘩は全て買った…ワケねーよ、常識的に考えて！そりゃ必死に逃げたに決まってる。

だけど宮ちゃんは有栖川を恨む事も憎む事も無かった。

良い子すぎるよね。うん。智祈がいなかったらたぶん俺宮ちゃんに惚れてた。有栖川に宮ちゃんなんて勿体なすぎるよ！

ちょっと話逸れたけど、そんなこんなで有栖川は土下座して宮ちゃんに告ってあっさり振られたとさ。めでたしめでたし。

それなのにめげずに何度も会いに行って最近ようやく付き合い始めたらしい。

「チッ、別れろや」

「あ〝ぁ？」

「すみません。調子に乗り過ぎました。ごめんなさい」

「わかりゃいーんだよ」

額に青筋を立てて睨んでいる有栖川に反射的に謝る。
ヤンキーパネェ…マジこわ。将来ヤクザになるとイイヨ！

有栖川って見た目（中身もだけど）こんなんなのに何で成績はあんなにいーんだろ。

君と二人で　5

「おーきぃーろぉー！」
肩を揺すられ起こそうとする声が聞こえる。
寝みぃ…
朦朧とした意識の中で何となく思う。
「起・き・て！」
ゴンッ――
頭に何ともいえない衝撃を受けて慌てて飛び起きる。
あれ？智祈がいる。夢…？
夢なのか現実なのか分からずボーっとして辺りを見回す。場所は俺の部屋で寝る前と変わらない。
いつもの癖で正面よりやや左上に掛けてある時計を見ると針は１１時丁度を指していた。ちなみに祖父が時計屋を営んでいるという事もあり部屋には目覚まし時計が３つに掛け時計が５つある。俺が見た時計は掛け時計の中で一番大きい時計だ。

やっと完全に目が覚めて久しぶりにまともに寝たと思った。いつも本を読むか小説を書くかで睡眠時間が優先されることが少ない。
って、んん〝？
妹の声が聞こえた気がしたと思い辺りを見回すが誰もいない。
あちゃー、ついに幻覚が見える程俺の頭は妹しか考えてないのか、と楽観的に考える。
とりあえず着替えよ。昨日風呂入ったか記憶にねぇーや。布団もひかずに寝たって事はたぶん帰って即ばたんきゅーだったのだろう。
シャワーだけでも浴びようと立ち上がる。ついでに近くに置いてあった服を適当に取る。
「よっこらせー」
Ｔシャツを脱ぎながら風呂場へ向かうと「ふあ〝ぁ！？」とよく分

からない奇声が聞こえた。
驚いて後ろを振り向くと妹が台所から顔を覗かせていた。あら可愛い。
「どした？」
やっぱり来ていたという至福感と幻覚じゃなかったという悔恨の情で変な声が出た。くねってる感じで…気持ち悪い。自己嫌悪。
「…ふっ、服きてぇー」
慌てて台所に引っ込んで言う声は次第に小さくなって聞こえる。
やべ、今の超録音したかった…！
悔しくてつい壁に頭をぶつける。
いってぇー！！今変な音した。智祈がこっち見てるよ。うわ、恥ずかしい。
余りの痛さに涙目になりながら妹を見つめる。
赤面したままの妹は挙動不審な動きをしていて小さい子供みたいで愛らしい。多分冷やすべきか迷ってるんだろうなーと冷静に考える。
結局智祈は台所で彷徨っている間に俺は風呂場に向かった。

君と二人で　6

俺の住んでいるここは一見古ぼけたアパートで人が住めるのか？と疑ってしまうようなところだ。だが内装は普通のアパートとそれ程変わりはなく、それなりの広さと清潔感がある。
玄関を入ってすぐ左手に小さめだが料理をするのに十分の広さがある台所。玄関を真っ直ぐいけば俺がさっきまでいた部屋、広さが十二畳あり男の一人暮らしにしては少し広い。
まぁ、俺の場合は本棚が壁に並んでいて一回りほど狭くなってるけど。それでも狭いとは思わなくて俺は全く不便じゃない。寧ろ少し広いと思ってるぐらいだ。
んで、この部屋を入って左側には洗面所とかがある。ちなみに風呂にはシャワー付きと見事なまでにボロい見た目を裏切っている。見た目築半世紀以上って感じなのにね。
部屋の間取りはこんな感じで親から仕送りされているということもありよく本である苦労学生ではない。どちらかと言えば裕福な家庭で未だにバイトをしたことがない。バイトがしたいなんて親に言えばじーちゃんの時計屋の手伝いをさせられるに決まってる。それなら子供の頃嫌という程手伝ったから今はもうやりたいとは思わない。てかやりたくない。
俺不器用だから時計弄んの苦手なんだよなぁ。
うちの親は変な所で過保護だ。大体この大学に通うことにした理由も単純すぎる。
普通、男より女の方が親からしたら可愛いものだから智祈の方を大事にするはずだ。なのに俺の方が可愛がられてる。
むぅ…確かに俺の方が精神年齢低いけどさ…
いっそ俺が弟でも良かったな、と思う時が少なからずある。智祈はお姉さんキャラだから。実際は妹ってとこが良いのだろうか…うーん……ギャップか…。使えるが…王道になりそうな予感。

途中から小説のネタについて考えてしまっている。頭が右に傾く。
うはっ！シャワーの水が耳に入った…
今シャワーを浴びてるって事を完全に忘れてた…。小説の事になると周りが見えなくなる。そのせいで今までいろいろと被害を受けている。…自分が悪いんだけどね。
考える時の癖でよく頭が傾く。それに気付いたのは数ヶ月前とごく最近だ。言われて初めてそういや視界傾いてんな、と思った。妹に指摘されてなかったらたぶん気付かなかっただろーな。
癖ってなかなか治らないから大変だよね☆でもそんな癖も妹が見つけた癖ならなおしたいとは思わないけどな！

そんなことを思う自分は本当にシスコンなんじゃないかと思う。…
シスコンじゃないけど。

君と二人で　7

風呂からあがると智祈が座布団の上にちょこんと座っていた。机の上に置いてある携帯を取ると同時に素早く妹を写メる。
よし、待ち受けにしよっ♪
ガッツポーズをすると妹は顔を背けたが遅い。しっかりきっかりばっちり撮ったぜ！
「もう！座って」
怒り気味に言う妹の声はいつもより少し高い。滅多に怒る事が無いから新鮮だ。その上可愛い！

「ほい」
妹と一緒に昼食をとった後に小説を書いたノートを渡すと嬉しそうに受け取る。
昼食は妹特製…何だこれ？何料理だ？美味しかったけど何ていう料理なのかさっぱり分からない。
「何料理？」
訊くと妹は笑いながらイギリスと答えた。
…まじで？
驚いて固まっていると冗談だよ、と言って食べ終えたばかりの食器を積んで一つにする。
「驚かせるなよ。しっかし相変わらず智祈の料理は美味いなぁ」
「そんな事ないよ」
智祈が軽くスキップしながら台所に食器を運んでいく。
超可愛いけど食器を落とさないか心配だ。もし落として怪我でもしたらと思うと…心臓が持たんぞ…。
俺の心境とは対照的に智祈の声は明るい。
「霞月の方が料理上手じゃん」
「飯意外はな」

妹の言葉に付け足すと笑い声が返ってきた。
「嘘ばっかり」
「そんなこと無い。」
断言したが智祈はそんな事全く気にしていない様子で再び皿を持って戻ってきた。
「にんじんのケーキ？」
「そう。よく分かったな」
昨日妹の為に作ったシフォンケーキ。にんじんは余っていたから使っただけでにんじんを使った理由は特に無い。でも見た目可愛くて良いよね！ホイップクリームがあったら良かったけど生憎今は家に無い。
「色とか匂いで何となーくわかった。」
妹が一口ケーキを口にした瞬間笑みを浮かべる。

自然と出る妹の笑みが好きだ。
だから昔、小学生低学年でまだ本も読まないぐらいの時はお菓子を作っては妹にあげていた。甘いものが好きな妹は喜んで毎回食べてくれた。
だから今では特技にお菓子作りが入ってる。俺がお菓子ってのは似合わないかもしれないけど今時料理する男子は普通だろう。
俺は単純だ。だから今も昔もそんな事ぐらいでしか妹を喜ばせてやれない。
昔はお菓子を作って今は小説を書いて…殆どその事に時間を費やしてきた。だから正直言って自分の為に費やした時間の方が少ない。

これはたぶんだけど俺が小説を書かなくなって“俺の時間”が出来ても何をすればいいのか分からなくて時間を無駄にするだけだと思う。自分の為にって言葉が俺にはイマイチ理解出来ない。

「お菓子しか作らないの勿体無いと思うな、霞月器用なんだから」
もさもさ食べながら妹が言う。小動物みたいで可愛い。
「器用じゃねーし。火使うの苦手なんだよ」
否定すると智祈はフォークを口にくわえて俺に視線を向ける。自然と目が合う。
「いや、ホントだよ？」
両方の事を再び肯定すると妹は目を細めたが「そーなんだ」と言っただけで視線をケーキに戻す。
器用さでいったら断然妹の方が上なんだけどな、さっきの料理も美味かったし時計弄んのもスゲーし。
…どうしたんだろ？
智祈が急に俯く。
……ん〝ー…閃いた！ふむふむ、そういうことか。智祈の事ならお兄ちゃんは何でもお見通しだぜ☆
「可愛いなぁー」
「なっにゃにがよっ！」
あ、噛んだ。動揺してるのが丸分かりだ。やばいやばい、すごいキュンとした。
こいこいと妹を手招きする。顔が赤くなりながらも素直に移動してくる。
いーこいーこと頭を撫でる。すると更に顔が赤くなった。
「子供扱いしないでよ…」
「はいはい、」
受け流すと智祈はむーっと唸った。
そんな事を気にせず抱きつく。腕の中にすっぽり収まる。見事にフィットしていて気持ちいい。抱き心地最高っ！
「撫で回したい…」

「変態」
「智祈だけだから安心して。」
「何その笑顔、怖い。」
さっきより声色がよくなったのを聞くとどうやら機嫌が良くなったようだ。
智祈はノートに書かれた小説を読みながら器用にケーキの残りを食べる。見てると食べたくなってきたな。
「智祈、一口ちょーだい」
抱き寄せて言うと腰に回した手をフォークで刺された。結構痛い…。
「まだ残ってるんだから自分で取りに行けば?」
挑発気味にノートから一切視線を逸らさずに言われた。
…どうしたものか、智祈の癖で本を読むと周りのことがどうでもよくなる。それでなのかは分からないが口が悪くなる。ついでに態度も。
本を読んでいる妹に抱きつく事は滅多に出来ないから大人しく読み終わるのを待つことにした。

君と二人で　9

「うん。なかなか良いんじゃないかな」
一時間ちょい経ってからようやく智祈が喋り出した。話し方や態度がいつもの智祈に戻っている。
「霞月って設定変だよね、奇抜って云うか…」
「ん？それの主人公って何だっけ？」
「料理好きの探偵」
あー、あれね。うんと頷く。
「初め犯人を当てずっぽうに言ってるだけかと思ったもん」
ＨＡＨＡＨＡ☆適当にこいつ人殺しそうだなって奴を犯人にしたからな！
「それで探偵が料理に例えて犯人の行動やら動機を見事に当てちゃうんだもん」
「レシピ調べんのめんどーだったよ」
欠伸を噛み殺す。いつもより長い時間寝たのに眠い。
レシピ通りに切って炒めて味付けして盛り付けという順に人を動かして行けば簡単だがそれの逆、犯人の行動と類似した料理を探したから苦戦した。
逆にやるべきだったが書いている時は夢中で全く考えていなかった。プロット立てても脱線してしまい最後までそれ通りに書けた試しが無い。だから主人公と大まかな設定を決めたら書き始める。その方が書けるし俺らしい。
けど実際こんな奴は小説家に向いてないんだろうな。そう思うけどなかなか出来ない。
「次どんなのにするか決まったの？」
ノートをパラパラと捲りながら訊いてくる。
「一応」
「プロットは？」

「頭の中にある」
「無いのね」
冷たく返された。
「主人公が普通の人でそいつの一週間でも書こうかと。」
今回はほのぼのとしたものを書こうと思っている。
智祈が読んでいる時に考えていた事を説明する。
「霞月の思う普通の人ってどんなの？」
「へ？」
予想外の質問をされて戸惑う。普通は普通なんだからどんなのって訊かれても…
「普通は普通だよ！」
胸を張って答えたが智祈は溜め息を零すだけだった。
ぐぬぬ。ここは書いて証明するしか無いのか…！
普通がダメなら何だ…何かいいアイデアは無いのか…
「まぁ別にいいけど、他は？」
あっさりと投げ出された。

ニヤリ
そういう事か。

君と二人で　１０

「料理…」
ぼそりと呟く。
「…火」
――ビクッ
智祈の体が一瞬跳ねる。
にやにや
後ろから顔を覗くと頬が赤らんでいる。ときめいた。
「べ、別にすっ…拗ねてないもん……」
あ、言っちゃった。
「拗ねてる智祈も可愛いよ…い　ぃ！？」
耳元で言ったら頭突きをくらった。さすが石頭、超いてぇ…2時間程前に壁にぶつけてまだ痛みがひいてないのにっ！
でもそんな痛みでさえ智祈によってもたらされたならこの痛みが一生消えなくていいと思う程愛おしい。
智祈に言ったらどんな反応するんだろう、と気になる時もあるけど言うと口利いてくれなくなりそうだから言わない。
無視されるより罵倒を浴びる方がマシだ。
一週間口を利いて貰えなかった時はリアルに泣いた。
それを知った友人に引かれた。

「可愛いとかゆーなっ！」
体育座りをしている脚に顔を埋める仕草もたまらなく可愛い。
「ごめん、」
頭を撫でてやるともたれかかってきて体に体重がかかる。そのまま抱きしめると手が重ねられた。
「ごめん。智祈の知らない事だったなんて知らなかったから」
「知らなかったじゃ済まされないの…」

陰のある声、智祈じゃないみたいだ。
「ごめん」
少しやりすぎたかな、反省。
謝ることしか出来ない自分はいつだって無力だ。

簡単に云えば智祈は俺のことについて知らない事があって動揺しただけ。
例えどんなに些細なことでもあいつは過敏に反応する。これは俺の所為だ。だからこれは俺が解決しないといけない問題、優くんに迷惑が懸からないようにしないと…
妙なプレッシャーがかかる。
どうしたものか…そもそも俺は一般的な双子を知らない。キョウダイに比べたら仲が良いもんだとは思う。だけど具体的なものが何一つ分からない。
俺たちの場合は普通の双子とは違うから…お互いに依存しているのは自覚している。だけどあいつ無しじゃ生きられないんだ…生きたって意味が無い。

昔の俺は今とは百八十度違って友達が一人もいない暗い奴だった。
それでも良いと思う自分がいたから変わろうと思わなかった。
でも智祈はそんな俺にどこに行く時も付いて来た。俺みたいなのと一緒にいても何の価値も無い。来るなと言ってもえへへ、と笑うだけで俺の拒絶なんて何ともないという様子で微笑んだ。
俺にはそんな智祈を気にするようになった。それと同時に恐怖した。
智祈の得体が知れなかった。人間じゃないものに思えて怖かった。
誰かの代わりに自分が傷付こうとする…
何であんなに無邪気に笑えるんだ――
周りの奴らは俺の事を“シスコン”と呼ぶが俺自身そんな事1?も

思っちゃいない。
智祈は俺の人生を変えてくれた。つまり恩人だ。借りと思っているわけじゃないが困っているなら助けてやりたい、泣いていたら慰めてやりたい、そう思ってる。それと同時に愛してる。
クサいかもしれないけど智祈には笑っていてほしい。智祈には笑顔が一番似合ってる。泣いてなんかいてほしくない。
妹は俺と違って強いし明るくて可愛い。だけどその分泣き虫だ。
昔も周りの奴等にイジメられていた俺を庇った時に智祈は「馬鹿！」と言って泣いた。庇ってくれた智祈が何で泣いたのか分からなかった。だから妹の言ったように俺は馬鹿だ。だけど馬鹿でも馬鹿なりに妹のことを想ってる。妹が俺のことを見捨てなかったように俺は何があっても妹を見捨てない。
いつからだろう…
いつから、俺は妹の事が好きだったんだろう――

君と二人で　11（前書き）

新キャラクター、嵯峨忍（サガシノ）　歪（ヒズミ）とハヤテ流雨（リュウ）。

誤字・脱字があったらすみません

君と二人で　11

大学に行くとトモダチと云うものが必ずと言っていい程声を掛けてくる。ウザくなけりゃ迷惑でもないからテキトーに相手にするのがいつもの事だが多少例外もある。
それが大学内でも変態カップルとして有名なハヤテ先輩と歪ちゃん。

「弟君！」
自分が呼ばれたんだとすぐに分かった。俺は一応兄だが弟っぽいと云うのと僕にとっては弟だと宣言されて以来俺のことを弟呼ばわりする人が一人だけいる。
「丁度良い、はぁっ、はっ、歪が探していたら、本棟に、…行ったと言って、くれないか？」
息を切らしながら走ってきたハヤテ先輩が言う。
「りょーかいっス」
舐めていた棒付き飴を口から出し敬礼してみせると先輩は頷き本棟とは逆方向にある別棟に向かって再び走り出す。あっ！
「先輩っ」
呼び止めると走る速度を緩め振り向く。くそっ、いつ見ても男前だぜ…。
「エネルギー補給♪」
ポケットから飴を取り出して投げると三つある飴を一つも落とすことなくキャッチする。
「ありがとう」
優しく微笑む顔は流石紳士、と言いたくなる程キレイで同性でも思わず見とれた。ハーフだから顔の形が外国人っぽくて整っている。超美形。是非とも顔を交換して欲しいものだ。男なら誰でも羨む程の顔だ。当然モテる。しかも男女性別問わずだ。
だが今逃走中ということは相手はあの子しかいない。羨ましいがあ

そこまでいくと勘弁してほしい…。
カラカラと口の中にある飴を回して遊ぶ。これ何味だろー、うめぇー
ハヤテ先輩を追うように別棟へ向かう。てくてく。カラカラ。
「カヅキちゃん」
鼻歌しながら歩いていると声を掛けられた。低くもなく高くもない、
少し幼い声が俺を呼んだ。ハヤテ先輩同様、誰なのかすぐに分かっ
た。
「どした？歪ちゃん」
声のした方を振り向くと案の定、歪ちゃんが立っていた。
「んー…リューくん探してる」
足元にあった歪ちゃんの視線が急に上を向き一瞬目があった。
反射的に体がビクッと痙攣した。
「先輩なら本棟に行ったけど…何かついてる？」
焦点が合っていない目で俺を見ている歪ちゃんに尋ねると小さく微
笑むだけで何も言ってこない。…嘘がバレたか？
「ありがと」
暫くの沈黙の後回れ右をしながら言う。
「あ、待って。飴…あげる」
ポケットから一つ取り出して腕を伸ばすと歪ちゃんは振り向き同じ
様に腕を伸ばして受け取る。
「悪いものじゃないけど気をつけて」
お礼の代わりに助言（？）を貰った。相変わらず不思議な子。
嵯峨忍歪、ハヤテ流雨のストーカー。って言われてる。
歪ちゃん自身は肯定も否定もしないから俺にはそれがホントなのか
分かんない。
俺に分かることは歪ちゃんはハヤテ先輩が好きすぎて病んでる。…
病んでるのは昔からでハヤテ先輩に出会ってそれが酷くなったと言
った方が正確かな。だけど良い子なのは確かだ。数少ない俺の昔か
らの友達。
ストーカー疑惑の女の子と超美形のイケメンハーフのバカップル…

ってあれ？あの二人って付き合ってるよな？何でハヤテ先輩逃げてるんだろう？？

何か違うくね？よく分かんないけど歪ちゃんはハヤテ先輩と結婚するよーな事言ってたから恋仲なのは確かだろう、…よくよく考えると――歪ちゃんは昔からだけど――あの二人は謎が多い。

てか俺の知り合いカップル多くね？

あぁ、かなしい…

カラカラと口の中で鳴る軽快な音とは対照的に俺の心は虚しくなる。

…キモイとか言うな！

君と二人で　１２（前書き）

今回は少し長いです。
物語的には全く進んでいません。

誤字・脱字があったらすみません

君と二人で　12

今日は優君に会いに行く予定があるから別棟に荷物を取りに行かなければならない。
そんなに長期間来ないというわけじゃないけど数日来ないと有栖川に私物を捨てられる。

「だから残念ながら晴海ちゃんの相手をする程暇じゃないんだ」
こたつの周辺をがっさがっさと荒らしながら言うと案の定苛立たしげに返された。
「だからって何だよ、意味わかんねぇーよ。あと毎回会う度に呼び方変えるな。うぜぇ」
「今日は智祈の為にハッキリさせに行きます！キリッ」
かっこよく決めたつもりが逆に引かれた。ハヤテ先輩みたいなイケメンがやればきっと決まるんだろーな。あーあ、世の中不公平だ。
「暫くお休みします」
頭を下げていうと有栖川の隣にいた宮ちゃんに写メられた。
ぴろりろりーん。
「人が頭下げてる姿なんて滅多に見れないよねー」
超空気読めてない！いや、いいけどね！それでこそ宮ちゃんだし？
土下座しなくて良かった。このノリじゃ土下座姿をブログに載せられかねない…
「付かぬ事をお聞きしますが霞月さん、」
コホンとわざとらしい咳払いをした後宮ちゃんが言った。てかつかぬ事って使い方違うくね？合ってる？
「優（ユウ）くんてダレ？？」
首を傾げると肩にかかった髪が揺れてつい目がいく。
「智祈が優君（スグル）って呼んでるやつなんだけどツンデレでねー」
ほうほうと頷く。

「めんどくせー。そしてうざい。死ねばいいのに。てか手出すならさっさとしろよ。俺が初めて奪ってもいーのかよ」
宮ちゃんが目を丸くする。
「かづが人の事悪く言うなんて珍しい。やっぱり智ちゃんしたこと無かったんだ…。」
やっぱり!?やっぱりって宮ちゃん智祈を今までそんなふうに見てたのかい!?お兄たゃんは少しショックだよ
「そこに反応するか?」
「ごめんごめん」
軽く謝られる。
「偽善者うぜー」
「偽善ではないよ、嫌われたくないだけ」
有栖川が途中で会話に割り込んでくる。
「えー、かづくんは“誰に嫌われても構わない”って感じするのに」
「うん、別に構わない。けど嫌われ者の妹なんて可哀想だろ」
「智ちゃんの為?」
「当然」
「シスコンより嫌われ者の妹の方がマシだと思うけどな」
むっ!聞き捨てならない。
「シスコンじゃねえ」
「ひにょっ!?」
つい大声が出た。それに吃驚したのか宮ちゃんが奇声を上げた。
「じゃあ何だよ。まさか恋愛感情で好きとか言わないよな?」
本気でキレそうになった。
「好きだ。悪いか?」
「冗談で言ってんじゃねーよな?」
そんな嘲笑なんかどうでもよかった。
ただ有栖川は俺の気持ちを知っていながらわざとそういう言い方をしてきたのが気にくわなかった。異様に腹立たしい。
「分かったような口を利くな。お前なんかに言われなくても俺が普

通じゃないのは知ってる。とっくに気付いてる。
で、だから何だ？」
「だから？
おいおい、てめぇ自分がおかしいって分かっててそのままでいるつもりかよ。それこそ異常だぞ」
「ちょっと待ったあぁぁーっ！」
二人の間に入って止めようと宮ちゃんが体を乗り出す。
「喧嘩しないでっ。春海はイライラしてるからってかづに八つ当たりしないの！」
「あ〝ぁ？何だよどいつもこいつもっ…！」
「春海！それ以上かづのこと悪く言うなら許さないから」
珍しく宮ちゃんがキレ気味だ。
「は？何？お前もこいつの見方なワケ？…そうだよな、お前こいつのこと好きだって言ってたからな」
ダンッ――
机を叩くと自分でもビックリするぐらい勢い良く手が当たった。少し痛い。
「そんな事今は関係無い。」
「関係無い？お前は当事者だからそんな簡単に言えるんだよな、一度でも和奏の気持ち考えたことあんのかよ」
「もういいよ…そんなこと……」
震えながら言う宮ちゃんの声が聞こえた。だけど智祈の時とは違い慰めようとは思わない。智祈じゃないから…思えない。
自業自得だな、と思った。
結局俺には智祈しかないんだ。目の前で女の子が泣きそうでいても平気で放っておける。友達でも所詮は他人としか見れない。
「……」
黙っていると有栖川が続けて言った。
「そうだろ。お前はいつも妹妹って妹の事しか考えちゃいねぇ」
「いいの！智ちゃんが大切なのは昔から知ってるから…もう、いい

の」

泣いたかもしれない。怖くて宮ちゃんの顔が見れなかった。情けない

こんなやつのドコを好きになったんだろう……宮ちゃんって物好き

だなぁ

「ちッ」

舌打ちをして有栖川が立ち上がる。そのまま部屋を出て行った。

「……」

暫く沈黙が続いた。

君と二人で　13

「ホントはさ…自分で言おうと思ってたんだけどね、」
先に声を発したのは宮ちゃんだった。
「春海に言われちゃった」
あははと笑いながら前髪を触る。
どうしてだろう…俺の周りの女の子はみんな強がって……笑う
「俺は…和奏のこと好きだよ」
「いいよ、そんな嘘。霞月とは昔からの付き合いだから知ってる。霞月の中では妹とそれ意外なんだもん。…私はそれ意外でしょ？」
頷くことしか出来なかった。否定しても宮ちゃんなら嘘だとすぐに分かるだろう。
「いつから…その、俺のこと…？」
曖昧な言葉だったが和奏は何を言いたいのか察して答えてくれた。
「んー初めは全然そんな風に思ってなかったんだけどね、中学の時かな。
でもそれを自覚したのは高校の時。
ほら、あの時いろんな人に絡まれてたでしょ。それで助けてくれた時に好きなんだって気付いた。」
「で、今は有栖川が一番なんだ？」
宮ちゃんは一瞬目を見開いて驚いたようがすぐに笑顔になった。
「かづは何でもお見通しだね」
「宮ちゃんとは昔からの付き合いだからね。でも智祈によく女心がわかってないって怒られる」
そんなこと無いのに、と呟くと宮ちゃんが吹き出した。
「プッ、ハハハ
智ちゃんも言うようになったね」
「昔はそんなに怒んなかったのにね」
「かづが悪いと思うよ」

「宮ちゃんまでっ！？」
理由も分からず責められるのは結構くる。宮ちゃんみたいな子に言われると特になー…小学生の頃からの付き合いだしこのサークルの中で一番まともな子だから。
でも一番の権力者だ。下手に関わったら家に帰れるか分からない。
それくらい恐ろしい。可愛い顔して中身は鬼な部分がある。隠れ鬼畜だね！

「あの、さ…」
「ん？」
のほほんとした空気が醸し出たと思ったら宮ちゃんの緊張した声がした。
「かづが良かったらでいいんだけどまた…昔みたいに名前で呼んで？」
「名前？」
予想外のことを言われて戸惑った。
「そう。ダメ…かな？」
上目遣いなんてどこで覚えてきたの！？一瞬ときめいちゃったよ！
「それで俺への気持ちにキリがつくならいいよ」
「意地悪」
「それはお互い様。和奏よりはまともで優しいって自覚してるんだけど」
「はいはい、私は人を利用しまくる悪人よ。」
「悪いとかそういう話をしてるわけじゃないんだけど」
「後ろにあるみかん取って。」
俺の言葉を無視して言う。
後ろを振り向くと段ボールが三つ積んであった。一番上にある段ボールを覗くとみかんが二十個程入っていた。
適当に掴むと二つとれた。結構大きめのみかんだ。美味しそう。
「こたつにはみかんよね～」

今にも歌い出しそうな声で言う宮…じゃなくて和奏に頷く。

君と二人で　１３（後書き）

中途半端なところで切れてます（，・ω・、）

毎回タイトルを忘れてしまう…ｏｒｚ

君と二人で　１４

もう外は春でぽかぽか陽気だ。そろそろこたつを閉まっても良い頃だと思う。でもこのサークルの住人は誰一人しまおうと言わず年中こたつがある。
夏には勿論点けないがあの暑さの中こたつを見るのは正直辛い。そこまで気温が高くなくても暑く感じてしまう。
次の小説は我慢大会なんてどうだろうか。秋にやる中途半端で地味なやつなんていいかもしれない。残暑時に我慢大会…絶対ギャグになるな、と思いながらも細かく設定を考える。
ノートどこだ？メモりたい。

和奏に釣られてみかんを剥き一口食べる。
「激うまっ！」
思わず声をあげるほど美味しい。
甘味が強く舌に伝わる食感が何とも言えず、ずみずしい。果実に弾力があり旬を過ぎているのもお構いなしに鮮度が保たれている。
「でしょー♪」
自分で作ったわけじゃないのに和奏は自慢気だ。
「どこで売ってんの？」
「どこでしょう」
ニヤニヤしていて悪人面としか表現出来ない。
ん〜…和奏の実家は普通に会社勤めで農家なんてやってないし…近所のスーパーのみかんはそれなりに美味しいけどこんなに大きくない。味もこのみかんの方が美味しい。
「みかん取って」
「はいはい」
二つ渡したのにもう食べ終わったのか、食べるの早いなぁ
「ほい」

机の上にまたみかんを二つ置く。
ってあれ？
「歪ちゃん…」
「うん」
「「いつの間に…！」」
和奏と声がハモる。
「美咲、探してもいなかった」
いなかったって…本棟をこの早さで探し回ったのか？
背中に冷や汗をかいた。
バレたら相当ヤバいな…
「そうだ！歪ちゃんはこのみかんどこで売ってるか分かる？」
話を変えようとみかんの話題を持ち込む。
「知らないけど美味しい。」
「だよねー美味しいよねー」
歪ちゃんの言葉を聞いた和奏がドヤ顔をする。うぜー
「しょうがないなぁ、答えを教えてあげよう！正解はーテケテケテケテケテケテケテケ・・・」
うおっ！痛い。自分で効果音言ってる子とか今時珍しいよ。
「春海ちゃんの実家でした！」
「まじかっ」
あまりにも衝撃的で思わず声を上げる。今なら和奏のドヤ顔の理由が分かる。
「あの有栖川のねー…」
「有栖川？……あぁ、夜鷹の恋人」
もしかして歪ちゃん有栖川のこと覚えてない？同じサークルのメンバーなのに…。けど歪ちゃんなら有り得る。
「あの不良の実家でねぇ」
意外意外と言いながらみかんを食べ続ける。
有栖川が農作業をしている姿を想像してしまいつい吹き出してしまった。やばい…ツボリそう……

「夜鷹、変わった」
唐突に歪ちゃんが呟く。
「そうだね」
同意すると和奏はえぇーっと顔を赤くする。照れているのか怒っているのか分からない。
「昔はもっと性格わるかった。」
言っちゃった…。しかしそれには本人もそうかもと言い頷いている。
これは、少し照れてるな。
本気で照れた和奏は叩いてくるから怖い。照れ隠しなのは分かるけど痛い…
俺はMじゃねーし有栖川みたいに強くない。普通の人間だ。
俺は痛みを感じる事が恐い。もう傷つくのは十分だ。昔充分な程怪我を負った。
だからいつも楽しそうか顔をして危険な道は避けてきた。逃げるしか無い。今の俺じゃ何にも勝てない。戦わずして勝てるわけが無いのは分かっている。戦わないと…いけないな、優くんと…
勝敗が分かる勝負でもなかなか楽しくなるかもしれないと期待してしまった。
どうせ悲しい結末になるだけなのに。

君と二人で　１４（後書き）

やっと投稿できた。
テスト辛い。
終わったからいいけど…

少しの間ｇｄｇｄが続くかも…です
もう少し話が展開するよう頑張ります

誤字・脱字があったらすみません

君と二人で　１５（前書き）

読み直すのを忘れていたので誤字・脱字があるかもしれません！＞＜

すみません…ｏｒｚ

次からは暫く二人しか登場しませんー

君と二人で　15

みかんの皮を剥きながら言う歪ちゃんの姿は何というか…幼く見える。
体格が小さいのもあるけど服装が真っ黒のコートで袖が長くだらーんとしている。小さい子供がお父さんのコートを着ているみたいだ。愛らしい。
別に子供が好きというわけでもロリコンというわけでもないけど。
この姿を見た殆どの人が同じことを思うだろう。
髪の毛に隠れて顔がよく見えないが前髪を上げた歪ちゃんは美少女だから。今は顔を隠すようになっちゃったけど偶にハヤテ先輩と一緒にいる時にはちゃんとした格好をしている。たぶんハヤテ先輩に言われてやったんだと思うけど…。好きな人に言われた事をやるあたり女の子らしいと思う。
まぁでも妹には適わないけどな！妹が一番可愛い。俺は妹が好きだ。
「妹が好きだ！」
大事なことだから二回…宮ちゃんがものっそい睨んでる。
こえぇー
「夜鷹どーした、腹でも壊したか？」
ちげーよおぉぉー！！歪ちゃん鈍感にしてもほどがあるよ！あれは怒ってるんだ
「んー。お腹っていうより気分が悪い、かな。…胸くそわりぃ」
最後の方は小さい声でよく聞こえなかったが完全にブラック宮ちゃんだった。
やっぱ恐いわ、この子。有栖川はこの性格を知っているのだろうか…って人の心配してる余裕なんて無い。
和奏が急に怒り出した理由が検討もつかない。
「何で怒ってるの？」
小声で歪ちゃんに話しかけると溜め息をつかれた。

「霞月が悪い」
「何で！？」
歪ちゃんもさっきまで和奏の様子がおかしくなった理由に気付いてなかったのに…
今日の俺は勘が冴えてると思ったがどうも気のせいだったらしい。
「振った相手の目の前で他の人が好きって平気で言える人の神経が気になるわ」
完全に怒ってらっしゃるっ！ごめんなさい。心の底から謝ります！
「ごめん、そんなつもりは無かったんだ…」
「歪、美咲先輩はそんな事ないと思うけど男の人には気をつけるんだよ。特にかづみたいな奴には！」
何故か俺の名前を強調して歪ちゃんに言い聞かせる。それに頷く歪ちゃんもヒドイ…
「歪ちゃん、俺より和奏を怒らせないようにうまくやるんだよ」
人生の教訓をすると見事なまでにスルーされた。
女の子って何でこんなに酷いことを平気で言えるんだろう…。怖いなぁ。

そのまま三人でこたつに入り雑談をしていたらいつの間にか寝ていたらしく起きたら午後六時だった。
「何か忘れてるよーな…。」
首を傾げると和奏が笑って再び寝るのを促した。
まぁいいかと思い再び横になる。
誘惑に負けてばたんきゅー。
明日から頑張ります。

君と二人で　16

「すーぐるクンっ遊びっましょー！」
翌日、始発の電車に乗り朝の六時台に優くんの家についた。
「すぐるくんー！」
インターホンを押さずにわざと叫んで呼ぶ。きっとすごく嫌な顔をするんだろうな。そう思うと笑みが零れる。
しっかし…なかなか優くんが出てこない。何これ、まさかの放置？
俺の声が優くんの部屋に届かないのは分かりきっているがここには防犯カメラが取り付けられてるし音声を拾うことも出来る。

「ゆーうーくぅーん、俺放置プレイとか趣味じゃないから開けてよー！」
門をガシャガシャと揺らす。
数分待ってみたが物音一つしない。無視か…。ひでぇ
「もう勝手に入るからな！」
助走をつける為に門から距離をとる。
智祈に合い鍵借りれば良かった。
でも行くことが分かれば絶対に止められるからなぁ。智祈は誰かが自分の為が行動されるのが苦手だから。そんなところも可愛い。この謙虚さを誰かさんにも見習って欲しいよ、切実に…

「よしっ！」
俺の身長はるか上にある門を見上げて息を吐く。
ザッという地面を蹴る音がして数秒後、タンッと思い切り踏み切る。
重力に逆らい体が宙を浮く。
いける！
門に手を突き柵を越えると体が前のめりに落ちていった。
やべぇ、着地に失敗する…っ！

咄嗟に受け身を取るとゴロゴロと数回転した後に止まった。どこも怪我をしなかったようで直ぐに立ち上がる事ができた。
てか勢いが良すぎてまじびびった。
「スグルくんの馬鹿野郎ッ」
叫ぶと携帯電話がメールを受信したのを伝えた。
『次スグルって呼んだらただじゃおかないからなシスコン野郎』
やれやれ、智祈にスグルって言われても普通に会話するのに…何だろ、この差は
てか見てたんならさっさと門開けてくれればいいのに。
「ユウくん短気過ぎるよ」
玄関に向かって歩くがまだ距離がある。建物が大きいから近くにあるように見えるが十分といえる程距離がある。てか嫌になる程遠い。門から建物までにバスとかあったらいいのになぁ。広くすればいいってもんじゃない。家なんだから住みやすさを重視しないと。金持ちの家は皆こんなもんなのかと疑ってしまう。
知り合いの金持ちはいるけど変人一家だから変な暮らしをしているから論外だ。そもそも基本ホテル住まいだから家というより別荘と呼ぶべきなんだろう。あと塔とか。
今時塔は無いよな…どこの国の話だよって思う。
まじキチガ…変人。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2106w/

君と二人で――

2011年12月25日00時55分発行